武蔵野日曜聖書講筵

パウロの回身
――使徒行伝第９章１～22章――

１９９１年６月９日
小池辰雄

パリサイ・サウロ　天来の光　地にぶっ倒されて　主よ！　われは汝が迫害するイエスなり
我が選びの器　パウロの回身　御霊のバプテスマ　キリストは宇宙的なひと　即霊法の世界

【使徒行伝９】

1サウロは主の弟子たちに対して、なお恐喝（おびやかし）と殺害との気を充（みた）し、大祭司
にいたりて、2ダマスコにある諸教会への添書（そえぶみ）を請（こ）う。この道の者を見出さば、
男女にかかわらず縛りてエルサレムに曳（ひ）かん為なり。3往きてダマスコに近
づきたるとき、忽然（たちま）ち天より光いでて、彼を環（めぐ）り照したれば、4かれ地に倒れ
て『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか』という声をきく。5彼いう『主よ、
なんじは誰ぞ』答えたもう『われは汝が迫害するイエスなり。6起きて町に
入れ、さらば汝なすべき事を告げらるべし』7同行の人々、物言うこと能わ
ずして立ちたりしが、声は聞けども誰をも見ざりき。8サウロ地より起きて
目をあけたれど何も見えざれば、人その手をひきてダマスコに導きゆきしに、
9三日のあいだ見えず、また飲食（のみくい）せざりき。

10さてダマスコにアナニヤという一人の弟子あり、幻影（まぼろし）のうちに主いい給
う『アナニヤよ』答う『主よ、我ここに在り』11主いい給う『起きて直（すぐ）という
う街（ちまた）にゆき、ユダの家にてサウロというタルソ人を尋ねよ。視よ、彼は祈り
おるなり。12又アナニアという人の入り来りて、再び見ゆることを得しめん
ために、手を己がうえに按（お）くを見たり』13アナニヤ答う『主よ、われ多くの
人より此の人に就（つ）きて聞きしに、彼がエルサレムにて汝の聖徒に害を加えし
こと如何ばかりぞや。14また此処（ここ）にても、凡て汝の御名をよぶ者を縛る権を
祭司長らより受けおるなり』15主いい給う『往け、この人は異邦人・王たち・
イスラエルの子孫のまえに、我が名を持ちゆく我が選びの器なり。16我かれ
に我が名のために如何に多くの苦難（くるしみ）を受くるかを示さん』17ここにアナニヤ
往きて其の家にいり、彼の上に手をおきて言う『兄弟サウロよ、主すなわち
汝が来る途（みち）にて現れ給いしイエス、われを遣（つかわ）し給えり。なんじが再び見るこ
とを得、かつ聖霊にて満たされん為なり』18直ちに彼の目より鱗（うろこ）のごときも

の落ちて見ることを得、すなわち起きてバプテスマを受け、19かつ食事して力づきたり。

サウロは数日の間ダマスコの弟子たちと偕におり、20直ちに諸会堂にて、イエスの神の子なることを宣べたり。21聞く者みな驚きて言う『こはエルサレムにて此の名をよぶ者を害いし人ならずや、又ここに来りしも之を縛りて祭司長らの許に曳きゆかんが為ならずや』22サウロますます能力くわわり、イエスのキリストなることを論証して、ダマスコに住むユダヤ人を言い伏せたり。

●パリサイ・サウロ

こないだの所は、ピリポの伝道でしたね。パウロの先駆者として素晴らしい、殉道のステパノ、それからピリポ。今度はパウロです。その前はペテロでしたね。使徒行伝は非常に我々に一番身近なところです。

今日の、９章1節から22節まで、大変な所です。

1サウロは主の弟子たちに対して、なお恐喝と殺害との気を充し、大祭司にいたりて、2ダマスコにある諸教会への添書を請う。この道の者を見出さば、男女にかかわらず縛りてエルサレムに曳かん為なり。

大変な事です。ユダヤ教のチャンピョンですから、サウロは。だけれども、サウロの先生のガマリエルの、

「彼らをお前たちは悪く言ったり迫害して、もし彼らが神によるのだったら、とんでもないことだ」

という言葉を、このサウロは、むしろそっちのけにしている。信仰で、自信に満ちると危ない。信仰が私されていますから。

私は内村鑑三の「無教会」の流れにいましたが、無教会の人たちは非常に自分たちの信仰に自信を持っている。

「信仰のみ」

と言ってね。私もそのグループの中に――内村鑑三、藤井武、塚本虎二――この先生方の傘下にいたわけだ。一流の先生方です。とにかく、無教会信仰は非常に純福音で、これのみというようなわけです。だから、

「教会なんか何だ、殊にカトリックはけしからん。教会なんか要らない」

と、そういう角度なんです、言わず語らずのうちに。内村先生はそこまで仰らないけれども、塚本先生は非常に

「反教会」

と言った。藤井先生はまともに「教会論」というものを書いておられる。

「あるべき教会はかくの如きものだ」

と。そして、

「教会という言葉は本当は訳としては面白くない。エクレシアというのは召される者の団体という意味で、召団という」

と、藤井先生は「教会論」の中で書いておられる。先生は「召団」という言葉を使わなかったけれども、どこまでも無教会ですから。

「キリストに召されたる者の団体」

ということ。これは何と言ったって新約聖書に大事な事態ですから。私は、

「幕屋」

というのを初め言いだしましたけれども、手島さんの「マクヤ」のグループと混同されても困るから――もちろん、「幕屋」と言いだしのは私ですけれども――公けの名称は

「召団」

という、名称はどうだっていいですけれども、そうなった。

召団であろうと、幕屋であろうと、教会であろうと、無教会であろうと、大事なことは、

「そこに本ものがあるか」

ということだけです。どうせ、人間のすることはみんな相対的ですから、相対的なものをどうだこうだと言い合ったって始まらない。ところが、相対的なものを絶対化するような事になるから、宗教の世界もそう――イスラム教とか、ユダヤ教とか、キリスト教とか。

「カトリックだ、プロテスタントだ、何だかんだ」

と――相対的なものそれ自体を手放しで絶対化していったら、これが

「パリサイ」（分離されたもの）

になる。ところが、宗教の世界はパリサイが多いんだ。創価学会なんかもパリサイだ。

「自分たちはこのように示されている、我々としてはその線でいく。甲は甲、乙は乙、どうぞご随意に」

と。そこに本当に、本ものが来ていれば、お互いに握手ができるわけです。本ものが来ていないと握手ができない。絶対なるものは神さまのものですから、私してはいかん。相対を絶対化すると、これはみんなパリサイになる。宗教戦争とか宗教的な争いは、みんなこのパリサイの争いだ。要するに自己主張だ。

その点で、私は「無」と言わざるを得ない。キリストが無だったから。

「私は何もできない。何も言えない。ちっとも善くはない。」

と、大変な方ですね。相対界をゼロにしていると、そこに絶対界が動きだす。それをなさったのはキリストだけです。

ところが、このサウロはユダヤ教絶対なんだ。今のユダヤ人もそれが非常に多いね。その相対を絶対化して、いきりたって、キリストを信ずる者を片っぱしからとっ捕まえて迫

害して、その死ぬをもよしとした。その第一号がステパノです。もうアンチ・クリストの最たる者だよ、サウロというのは。とんでもない野郎だ。自信が強いし、意志力も強いし、実行力も強い。ところが、この反対者を、とうとうキリストは、

「これは話したってしょうがない、ぶっ倒してやろう」

と、最後の手段を使われた。

ダマスコにも大分、クリスチャンがいるわけだ。エルサレムから散らされた者がダマスコにもいた。エルサレムの本山もあるし。だから、ダマスコのそういう連中をとっ捕まえると言って、大祭司の添書をもらって出掛けて行ったわけだ。

●天来の光

3 往きてダマスコに近づきたるとき、忽ち天より光いでて、彼を環り照したれば、

これと同じような記事が22章と26章に出ていますから、また参考にしてみてください。大祭司の前で語っているのと、アグリッパ王の前で語っているのと二つあるわけです。

「忽ち」、忽然として――時々、忽然として来る――

「天より光いでて」

というのは、太陽の光よりか凄い光です。正に霊光です。

私は、まぁパウロにはもちろん比較できませんけれども、しかし非常に著しい事が起きたことは、今度の『エン・クリスト特別号』（１９９１年５月号「聖書伝道五十年の峠にて」）の８頁の所に「瀧見荘ペンテコステ集会」というのを書いたでしょ。

「瀧見荘ペンテコステ集会
頃は美し、一九五〇年晩秋の
十一月三日から五日にかけての
大阿蘇は垂玉温泉瀧見荘での
特別聖会に招かれた。
彼は既に聖霊を受けた器であった。
十月十五日に手島兄のしたためた
愚生への書翰のひとくだりに
「十一月三、四、五日の阿蘇集会の
参集者に画期的な恩恵降るべく、
先生はそのための神の特選の使者、
先生の上に一大印綬がキリストから授けられ、
日本のために起たれる運命を
黙示された」との言があった。

私は平伏して祈りつつ阿蘇を待った。
大阿蘇の自然今や紅葉の綾錦もて
我らの集会（つどい）を祝福せんとし、
瀧の音齊（ひと）しく讃美せんとどよもしていた。
知らぬ間にみ霊は私にはたらき給ひ
語る詩篇に、祈る私に感応の声
おのづから湧き立つではないか。
十一月五日の祈祷会のとき、
突如天来のみ霊の光に貫かれ、
からだがその瞬間宙に浮き
全身聖霊に痺（しび）れ異言爆発！
平伏した、キリストのみ前に。
噫これが聖霊のバプテスマ！
その祈祷会は未曽有のもの、
二十名ほどの女性たちが
期せずして霊歌の合唱、
天与の異言の調べ何ぞ美しき、
天使らがこれに和して歌っていたろう！」

これもそうだ、やっぱり

「突如」

と書いてある。誰かが1メートルと言ったが、1メートルということはないけれども、身体がちょっととにかく浮いてしまった。そこにぶっ倒れた。もし、あの時に録音があったなら、本当に録音したかった。霊歌をおのずから、みんな目をつぶって歌っているんだ。手島さんがタクトをとるようにやってました。この霊歌は本当に素晴らしかったね、前にも後にも恐らくないでしょう、あの時のようなのは。

これが私の決定的な、出無教会。手島さんも前に聖霊は受けていますが、これが原始福音のペンテコステだと言って、今でもそうやって覚えているわけですね。

私は異言を知らなかったけれども、手島さんが異言を語った。彼は雑誌にその事を『異言論』というのを書いた。これを読んで、私は

「これは本当だ」

と手紙を書いた。

「これを本当だと言ってくださったのは小池先生だけだ。これは私の家宝のようにしまっておく」

なんて言ってね、返事がきた。あの人とは人間的には随分いろんな面が違うけれども、気

合は合うんです。人間的な癖でもって、人をどうのこうのと思っていたら、それは始まらんですよ。手島さんなんか、なかなか癖のある人だからね。それで躓くです。そうじゃない、その人の一番大事なものは何か、それを見て、手島さんも私もお互いにそこを見て、交わっていたわけだ。

そういう天来の光。私も正にそうなんだ。いや今でも本当にまざまざと思い出します。本当は話しにならない。

「そういう事があるか」

と。

●地にぶっ倒されて

救世軍のブース大将という人が貧民や何かに伝道する。だけれども、一人では大変だから、

「貴方は誰か助けの伝道者も要るんじゃないですか、どういう人を貴方は選びますか」

と聞いたら、ブース大将は何と答えたかというと、

「大酒飲みから選ぶ」

と言った。非常に反対な人間の中にもの凄いものが、実は隠されている。

とにかく、生き方は、酒を飲むにしても何にしても全身的な人、そういうのをひっくり返すと本ものになる。パウロが大きな間違いをしている。こいつをひっくり返す。内村先生もかなりパウロ的な性格の人だ。だから、

「私みたいな奴が救われたんだから、誰でも救われる」

と、これは正直、内村先生はそう感想を述べている。それじゃ酒飲んでから救われようなんてダメだよ（笑）。そんな事を考えたってダメ。手島さんも少しお酒を飲み過ぎたね。

結婚式であろうと何であろうと、葬式であろうと、全部、本質的には伝道です。だから、本当に聴く人は、それでとっ捕まる。大学生なんか、非常に興味を持って聞くんだけれども、興味を持って聞くだけじゃダメなんです。やっぱり、やって来なければ。体当たりして来なければ。だから、

「聞く者は多いけれども選ばれる者は少ない」

というのはそのこと。

太陽の光以上の霊光でもってめぐり照らしたという。すっかり光に包まれてしまった。光に包まれたから、あるいは、貫かれたから、地にぶっ倒れてしまった。「倒れて」じゃない、「倒されて」なんだ。本当は受け身なんだ、ギリシヤ語は受け身じゃありませんけれども。

「かれ地に倒されて」

なんです。

4 **かれ地に倒れて『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか』という声をきく。**

この声をはっきり聞いたのは、もちろんサウロだけです。何か声がしたと思ったような人もいたらしい。また、光だけを見た人もいたらしい。いろいろなんだ。けれども、見たんじゃない、これは。包まれてしまって、倒されてしまって、今度は、驚くべき声を聞かされてしまった。これは、酒飲みどころじゃない、キリストを迫害するものだから。

●主よ！

5 彼いう『主よ、なんじは誰ぞ』

ここでいきなり、

「主よ」

ときてるね。あなたは誰ですかと。大分もう参ってしまったようだ。何か凄いことになってしまったものだから、仕方がないから、「主よ」なんて言った。

この「主」という言い方は使徒行伝に一番たくさん出ている。新約聖書の、多分、四分の三くらいが使徒行伝に出ている。

「救い主」

ヘブライ語の

「アドナイ」

という言葉です。わが主、主イエス。「主よ！」と呼びかける時は、

「キリエ」

という。

「救贖（きゅうしょく）主」

と言ってもいいんだ、救い主、贖い主。これを簡単に「主よ」という。私たちの祈りも、ただ、

「主さま！」

と。これはもう、中心ですから。パウロの信仰の中心は何といっても、キリストなんです。キリストにひっくり返されて、「主」のみです。もちろん、「父よ」もあります。キリストが、

「父よと祈れ」

と、主の祈りにあるけれども。

「天にまします我らの父よ」

と。キリストには「父よ」ですよね。我々には、一番直接なのはキリストなんですから、「主さま」だ。何もキリストのマネをする必要はない。いいですよ、「お父さま」でも、どっちでも。これはもちろん離すことはできない。

「キリストを主という者は本当に救われている」

と。これはヨハネ書簡の第一書にも出てますが。

ヨハネ伝の９章のところに、盲（めしい）が目を開けられたところがある。あそこにも似たような

告白がある。

「35**イエスその追い出されしことを聞き、彼に逢いて言い給う『なんじ人の子を信ずるか』36答えて言う『主よ、それは誰なるか、われ信ぜまほし』37イエス言い給う『なんじ彼を見たり、汝と語る者はそれなり』38ここに、かれ『主よ、我は信ず』といいて拝せり。」**（ヨハネ9・35～38）

めくらの人が目を開けさせられた。「人の子」とはメシヤのこと。これは隠された言葉です。

「**メシヤを信ずるか**」

「**主よ、それは誰なるか**」

これがちょうど今のパウロのこの言葉と似ている。

「**なんじ彼を見たり、汝と語る者はそれなり**」

「私だよ私がお前の目を開けた、私が人の子だよ」

と。かれ、

「**主よ、我は信ず**」

と、そこで始めて「主よ、我は信ず」と言って、

「誰だか知りませんが、私の目を開けた人があります」

と、こういうわけだ。

イザヤ書の35章を福音書のキリストは全部、現実に展開した人ですから、大変な霊止（ひと）です。東西古今にキリストのようなひとはいません。お釈迦さんがどうだって、キリストとはまた次元が違う。

●われは汝が迫害するイエスなり

5**彼いう『主よ、なんじは誰ぞ』答えたもう『われは汝が迫害するイエスなり。**

はっきり言われた。

「私はお前が迫害しているイエスだ」

と。イエスは迫害されてない、弟子が迫害されている。けれども、

「弟子を迫害するのは私を迫害していることだ」

というわけで、そこはもう率直にキリストは、

「私を迫害して、お前はとんでもない、だからひっくり返したんだぞ」

と、こういうわけです。

6**起きて町に入れ、さらば汝なすべき事を告げらるべし』**

直接こう言われた、キリストがいきなり。

7**同行の人々、物言うこと能わずして立ちたりしが、声は聞けども誰をも見ざりき。**

何か知らんけれどもエライ事になった、パウロは何かものに憑かれたようだ、と。声を聞

いたって、その中身は分かりはしない。

[8]サウロ地より起きて目をあけたれど何も見えざれば、人その手をひきてダマスコに導きゆきしに、[9]三日のあいだ見えず、また飲食(のみくい)せざりき。

目をあけたけれども見えないと。ダメなんですよ。「ダマスコに行け」と言われても、彼は一人で行けない。連れて行かれた。そういう状態に陥った。そして三日の間、見えず飲食できない。三日間ちょうどキリストの復活が十字架に懸かって三日目だが、これは三日間だからもっと長い。まるで死んだと同じですよ。これは全く降参させられてしまうんです。

「降参した」のではなくて、これも受け身だ。降参させられた。

「参りました！」

と。福音の世界は降参するまでは入れない。分かったの分からないのと、そんなことではない。ギリシヤ語ができる、ヘブライ語ができる、そんな事ではない。真剣勝負です。あなた方、本当に参ったかね。

「聖書研究会」

なんてね、いくらやったって聖書の世界に入れっこないんだ。私は聖書研究会なんて大嫌いだ。ご苦労さまと言いたくなる。

ドイツ人は「研究」が好きだ。そしてディスカッションしている。こうだああだ、といって。

「私はディスカッションなんかしない。あなた方はよくディスカッションするが、私はそんなものは要らないんだ」

と言ってやった。ルター教会の牧師が

「洗礼を受けましたか？」

と聞くから、

「私は牧師からなんか洗礼を受けない、いきなり上からだ」

と言うと、

「プロフェッサー小池は洗礼を受けていないから、話させてはダメだ」

と。そんな洗礼じゃない。本当の洗礼を受けているんだ、こっちは。福牧師は私のことを少し分かったけれどもね。私に小さなグループに聖書の講義をさせた。

「どうして、そんな心境になったか？」

と聞くから、

「私は聖霊のバプテスマを受けた。あなた方は受けてないようだが」

と言ってやった。ルターの開いた宗教改革をまたこっちから逆に宗教改革してやらなければならない。本当ですよ、今から20何年前だ（１９６１年5月から１９６２年4月までハンブルク大学哲学部門の日本学ゼミナールの客員教授として渡独）。

パウロは三日間、全く、完全に参ったね。

「凄い野郎だから、もう完全に参らせなければどうにもならない」

と、キリストはとっ捕まえて、非常手段を用いられた。一番反対な、「アンチ・クリスト」がキリストの最大の弟子になった。こんな鮮やかな転向は、およそ歴史に他に無いでしょうね。それで、ユダヤ人は、

「パウロは、あれは間違った」

なんて言っている。冗談じゃないんだ。

我々の側の信仰がサムシングになっているうちはダメですよ。ただキリストに、御霊に圧倒されているだけのはなし。

「信仰うすき者よ」

なんてキリストが言われたが、私はむしろ、

「信仰無き者よ」

で結構なんだ。

「私には自分の信仰なんて有りません、あなたの信仰をいただきました。キリスト様、あなたの信が私の中で生きだしました、有り難うございます」

と、それだけだ。だから、もの凄いものが来るんです。

「この火、燃えたらんには、何をか要せん」

と、キリストのあの言葉が非常にうれしいね。この聖霊が私の中で燃えているから、もう他は何も要りませんと。

●我が選びの器

10 **さてダマスコにアナニヤという一人の弟子あり、幻影（まぼろし）のうちに主いい給う『アナニヤよ』答う『主よ、我ここに在り』**

アナニヤもいきなりキリストに言われたんで、びっくりしてしまったんだよ、これ。エルサレム本山のペテロやヤコブに言わないで、ダマスコにいるアナニヤという人に言われた。しかも他にいないです。

エゼキエルというのは不思議な預言者なんだよね。エゼキエルの22章30節に、

30 **「我一箇（ひとり）の人の国のために石垣を築き我が前にあたりてその破壊処（くずれぐち）に立ち我をして之を滅ぼさしめざるべき者を彼等の中に尋ぬれども得ざるなり」（エゼキエル22・30）**

「修理をするような一人の人を彼らの中に尋ねたけれども一人もいない。ダメだ、もうこれは滅びだ」

と。この

「一人もいない」

というのはダメなんですね。一人でもいればいい。この場合には、アナニヤという選びの

器が一人いたから。

個の存在は非常に大事なんですよ、あなた方一人一人が。何を神さまに期待されているか分からないですよ。こっち側の何かではない。呼ばれたら直ちに、

「はいっ！」

と言って立ち上がらなければダメ。人間の考えで模索しているうちは、いつまでたってもダメです。反って優秀な人がむしろダメです、もちろん全部とは言いませんよ。

11**主いい給う『起きて直（すぐ）という街（ちまた）にゆき、ユダの家にてサウロというタルソ人を尋ねよ。視よ、彼は祈りおるなり。**

「すぐ」とは「ユーテイアン」というギリシヤ語だ。「まっすぐ」という字です。パウロは祈らざるを得ない。エライことになってしまったと。キリストにとっ捕まえられてしまった、そしてもう、これだけやっつけられたと。だから、平伏して祈っているその姿を見て、今度はキリストがアナニヤに、「そういう奴がいるから行ってやれ」と。

12**又アナニアという人の入り来りて、再び見ゆることを得しめんために、手を己がうえに按（お）くを見たり』**

「手を己がうえに按くを見たり」と。そういうような事を祈りの中でもう、はや彼は幻で見ている。「だから行ってやれ」と。こんなことは本当に有るんです。パウロはそれを見ている、祈りの中で。

13**アナニヤ答う『主よ、われ多くの人より此の人に就（つ）きて聞きしに、彼がエルサレムにて汝の聖徒に害を加えしこと如何ばかりぞや。**

「何だって、あなたはそんな事をおっしゃるんですか」

と、アナニヤは今度はキリストにあるがままに、

「サウロなんて奴はとんでもない奴だ」

と言って、キリストに反問しているわけです。

14**また此処（ここ）にても、凡て汝の御名をよぶ者を縛る権を祭司長らより受けおるなり』**15**主いい給う『往け、この人は異邦人・王たち・イスラエルの子孫のまえに、我が名を持ちゆく我が選びの器なり。**

ここに初めて「選びの器」という言葉がでてくる。

「大反対と思っているこの者が選びの器なんだ。サウロの在り方は大きな間違いだけれども、その全身的な熱心さ、打ち込み方、これをひっくり返して、御名のために、キリストのために、福音のために、そいつを使う人間にする」

と。そういう意味で「選びの器」。そのためには一辺ひっくり返さなければダメなんだと。

●パウロの回身

私は

「回身」
と書いたが、こんな言い方はないでしょ。普通は
「回心」
心をめぐらすと書く。心ぐらいじゃダメなんだ。全存在がひっくり返らなければ。正にキリストにひっくり返されたのは、この回身なんだ。身が回らされてしまう。
使徒行伝の９章なんて、いい加減な気持で読めやしないです、パウロがひっくり返されたことは。これがひっくり返ったので、新約聖書の大事なところはこのパウロが書いたじゃないですか。本当に選びの器です。
「罪びとの首なり」
と言ったパウロは、使徒の首になってしまった。
パウロはもう何ものも恐れないで進んで行く。あのたくさんの艱難を突破して行く。コリント後書11章に書いてある。これだけの艱難に遭って、これを突破した。普通の人ならみんな仆れている。これは全部、聖霊の力です。これだけの艱難を突破した人は他にない。
今は、自動車に乗ったり何かして、パウロの足跡を尋ねるなんて、パウロの足跡を尋ねるのなら本当は歩かなければダメなんだよな。今の何とか旅行なんてのはみんなアンチョコな旅行だ。
そして、また言われた。
16 **我かれに我が名のために如何に多くの苦難を受くるかを示さん』17 ここにア**
ナニヤ往きて其の家にいり、彼の上に手をおきて言う『兄弟サウロよ、
今度は、これだけのことをキリストに言われたものだから、アナニヤも、もう参ってしまった。そういうことですかと。で、
「兄弟サウロよ」
と来たよ、今度は、親しんで。
私たちの間は本当の、福音の世界ではこの世の秩序とは別な秩序で、みんな兄弟姉妹なんです。奥さんであろうが、何であろうが、
「兄弟姉妹よ」
と言えるわけです。キリストの生命につながっているんだ。信仰の事態が本ものでなければ、そういうことが自然な気持になれないんです。いくら「兄弟」とかいくら「姉妹」なんて言ったってね、うわっつらだ。体裁で言ったってダメなんだ。
『兄弟サウロよ、主すなわち汝が来る途にて現れ給いしイエス、われを遣し
給えり。なんじが再び見ることを得、かつ聖霊にて満たされん為なり』
「再び見えるため」どころじゃない、
「本当に見えることができるため」
にだ。はっきり言ったね、今度は。そして手を按いた。按手したんだ。そしたら、

これも「直ちに」だ。「見ることを得」、この「見る」は、目を開いたって見えなかったのが、今度は本当に見えた。

18 **直ちに彼の目より鱗（うろこ）のごときもの落ちて見ることを得、**

●御霊のバプテスマ

いやぁ私は阿蘇で聖霊を受けたあと、とにかく阿蘇の自然が輝いて見えました。ええ。いやぁなんて美しいんだろうと。

「鱗（うろこ）のごときもの落ちたり」

という表現は面白いね。だから、汽車の中で聖書を読んだら、ベールが取れていた。

「なるほど今まで何を読んでいたか」

と。それで、私はもう無教会はサヨナラだ。内村先生がどんなに素晴らしい先生であろうが、藤井先生がどうであろうが、しょうがないや、この次元に来てしまったら。もう、その時は、藤井先生はもちろん居なかった。内村先生も。１９５０年だからね。内村先生、藤井先生は１９３０年に逝ってしまったから。矢内原先生はまだおられたよな。矢内原先生に――こんなことは言いたくないけれども――

「手島さんとグルになった」

と言って、すっかり切られてしまった。

まぁ、人生はドラマですね。しかし、どういうドラマでもいいから、とにかく、そのプラス・マイナスを通して、本当のプラスの世界に、キリストの世界に行けばよろしい。あなた方は一人一人みんな、かけがえのないドラマの中を歩いているわけです。それで、このキリストの光で見えるようになると、どんなマイナスも全部、変質してプラスにすることができるんです。

すなわち起きてバプテスマを受け、

御霊のバプテスマを受けた。もう「目より鱗のごときものが落ちた」時に、この時に既に、聖霊を受けているからね。

19 **かつ食事して力づきたり。**

三日間、食べなかったから。やっと、食べられるようになった。

サウロは数日の間ダマスコの弟子たちと偕におり、20 **直ちに諸会堂にて、イエスの神の子なることを宣（の）べたり。**

こういうわけだ、と言ってね、迫害していた奴が逆に今度は、キリストを伝えだした。

21 **聞く者みな驚きて言う『こはエルサレムにて此の名をよぶ者を害（そこな）いし人ならずや、又ここに来（きた）りしも之を縛りて祭司長らの許（もと）に曳きゆかんが為ならずや』**

そんな奴が逆なことを言っているが、とんでもない奴だ、詐欺師じゃないかな、なんて。

みんな不思議がるわけです。それはそうですよ。ところが、

22サウロますます能力くわわり、イエスのキリストなることを論証して、ダマスコに住むユダヤ人を言い伏せたり。

言い伏せたけれども、本当に信仰したかは、また別問題だ。

サウロという名前は、もうひとつ、旧約に居ましたね。ダビデの前の王様だ。サウル。サムエル前書の10章だ。

「サムエルすなわち膏の瓶をとりてサウルの頭に沃ぎ口接して曰けるはエホバ汝をたててその産業の長となしたもうにあらずや」（サムエル前10・1）

膏をそそいだと同時に聖霊を注ぐことの、一つの徴ですから。膏を注げば聖霊がかかるんじゃないですよ。サムエルみたいな預言者はもちろん、膏を注がなくたって、按手すればいいんだけれども、これは一つの徴になっているから仕方がない。

「膏そそがれたる者」

とは

「聖霊を受けたる者」

ということになってしまった。

そうしたらば、聖霊を受けてしまったものだから

「6その時神のみたま汝にのぞみて汝かれらとともに預言して変りて新しき人とならん。7これらの徴汝の身におこらば、手のあたるにまかせて事を為すべし。神汝とともにいませばなり。」（サムエル前10・6～7）

神さまが一緒だから手あたり次第にやって間違いないぞ、聖霊の自然の動きだと。「新しき人」とはむしろ

「別な人」

と訳した方がいいくらいな字です。

「イーシュ・アッヘール」

というんですけれども。

「別人となるぞ」

と。サウロは正に別人となった、このサウルと同じように。ところが、サウルの場合は、今度は俺は何をしてもいいと思って、いい気になった。いい気になったら危ない。霊的な人は、今度は逆にサタンに憑かれて――サタンは狙うからね、霊的な人間を――そして、ひっくり返される。聖霊かと思ったら、今度はサタンの霊がとっついてしまって、それで今度は、ダビデを追いかけたりなんかした。ダビデは、「敵は本能寺」をしなかったけれども、どこまでも逃げて行ったけれどもさ。

●キリストは宇宙的なひと

だから、聖霊が来たらば、いよいよもって十字架が土台になっていなければ、危ないんです。

「この火燃えたらんには、何をか要せん。その前に、私が受くべきバプテスマがある。十字架だ。思いせまることいかばかりぞや。」（ルカ12・49～50）

と。キリストは、十字架を受けて、

「それからお前たちに聖霊をやる」

という、この順番がちゃんと、あのルカ伝12章49、50節の大事な言葉の中に出ている。ルカ伝12章49、50節は忘れないでくださいよ。私は著作集第十巻に書かなかったのは大失敗だった。再版する時には、書き入れるよ。

「私の受くべきバプテスマ、十字架をもって、お前を贖罪したから、もう心配は要らん。過去・現在・未来のお前は全部、私は贖いとってしまったから、自分なんか顧みるな。私を見ろ。私の中に飛び込んでこい。」

と、これが聖霊の世界だ。実にあり難くて無条件で簡単な素晴らしい世界を、なぜみんな遠慮しているんだろうね。遠慮することはないじゃないですか。ただし、降参して平伏して入りなさいよ。実は、十字架で降参させられているんだから。その事に気が付けばいい。こちら側の何ものでもない。決定的な他力本願なんです、十字架でも聖霊でも。

決定的な他力本願は、仏教ではこの前お話しした一遍上人です。私の詩の中には、そんな奴がみんな出てくるから面白い。どういう構造で出てくるかは、それは言わないでおこう。

「なるほど、この人はキリスト教かと思ったら、仏教のことも凄いんだなぁ」

と。パリサイじゃないからね、いいものはいいとして……。ただ、キリストだけは、これは絶対に次元が違うから、そのことははっきり言う。

キリストは宇宙的な霊止ですから。宇宙人なんだ、本当の意味の。本当の意味の宇宙人はキリストです。それをね、大方のユダヤ人はまだ受けとらないんだから、困ったもんだよ。

「頑くななる民」

と旧約に書いてあるが、本当に「頑くななる民」だね、このユダヤ人というのは。頑くなのチャンピョンがパウロ。このチャンピョンをひっくり返したのはキリスト。こんなはっきりしたことはないんだ。

「お前たちのチャンピョンはひっくり返されているんだぞ。そのキリストをいい加減にしてみろ。どういうことになるか知らんぞ」と。

●即霊法の世界

そのサウルは別人（パウロ）となって、

「我が思うところ矩を越えず」

どころじゃない、我が思うところは即ち霊法に即している、即霊法の世界なんだと。孔子

さんの世界はまだ手前ですよ。孔子や孟子は、キリストの光で読めば面白いですけれどもね、次元はちょっとまだ手前だ。そんなことを普通の人が言ったらね、

「なんだ、小池という野郎は傲慢な奴だ」

と。そうじゃないんだ。傲慢じゃないんだ、ちっとも。キリストに降参したら、そういう位置づけがだんだんできてきたからしょうがない。

ソクラテスも素晴らしいけれどもね、まぁ、いろんな奴がでてきますから――「やつ」と言ったら悪いけれども――東西古今いろんなやつが出てくるよ、私の詩の中には。びっくりするな。ああ、おもしろい、おもしろい（笑）。ええ、これを書かないで死ぬわけにいくかと。どうしてこんなことになってしまったんだろうね。出てくるのは、偉いやつばっかりじゃないよ。名もない人も出てきます。これは、ダンテの天国よりか面白いから。

それだから、サウルはダメ。十字架がないから、はっきりしている。ダビデも素晴らしいけれども――

「アブラハムの子、ダビデの子」

なんてキリストのことを言うけれども――しかし、ダビデでも。結局、キリスト以前の世界は、あるところまでだ。ただ、預言者イザヤだけは凄い。イザヤ書はもう本当に旧約の総決算みたいなところだ。もう、イザヤ書には頭が下がるね、本当に。詩篇じゃないよ、イザヤ書だ。詩篇を読んでいると、大分まだ癖があるよ、詩篇の祈りを見てると。いろんなものが見えて困る。もうイザヤ書は本当に凄い。

何も枠がなくて、もの凄い中心がある、とこういうことです。枠がないから、パリサイにならない。それではいい加減か、というと、もの凄い中心がある。宇宙の中心みたいなのがある。

とにかく、誰にしても、ある一つの決定的な点を――どういう時でもいいです、どういう事柄を通してでもいい――そこを通らないとね。人によっていろいろです。むしろ、この世的にマイナスの強い時、その時に天の光がくる。この世的に調子がいい時には、来ないよ、なかなか。地獄のどん底が天国の頂きに通ずる。深い深淵に星の光が映る。一番ダメなのは、いい加減ということ。自己をゴマかし、ひとをゴマかしている世界。

本当に行き詰まりを知らなくなる。知らなくなるどころの騒ぎじゃない、いろんな事にでっくわせば、逆に聖霊の力が働く。ああ、本当ですよ。なんと有難いね、この聖霊というのは。聖霊なんてものは、そんな角度から勝手に私は言うけれどもさ、そんな事は、私は無教会にいた時には絶対に聞けなかった。

深い涙を持つ人がもっとも素晴らしい笑いを持っています。涙を持たない笑いなんてものは浮いてしまうです、この人生において。

では、そこまで。